

## 【「信頼できる建築とは何か」提案論文公募・最優秀賞受賞】

(日本建築家協会、兵庫県建築士会、建築設計監理協会、設計事務所協会主催・神戸新聞事業社後援)

### 「信頼できる建築を目指して」の3つのステップ

連健夫 (むらじたけお)・建築家

「信頼できる建築を目指して」3つのステップが必要と考える。これは、1、匿名性を廃止する、2、参加の設計プロセス、3、文化としての建築づくり、である。今回の耐震強度偽装問題は、建築士に対する世間の信頼を大きく失墜させた。一級建築士が設計したマンションに耐震強度偽装があり、地震に対する強度不十分という住み手の安全を脅かすという決定的事態が生じたのである。これは、耐震強度偽装をした姉齒元建築士本人の問題のみならず、利益を優先した民間審査機関の審査の甘さや、確認申請業務を民間でも審査できるようにした国の責任など、問題の理由原因、責任が追及された。これを機に、一級建築士制度そのものの見直しや一定規模以上の物件における構造一級建築士や設備一級建築士の必要性など様々な改善が行われている。はたして、これらの改善のみで耐震強度偽装のような問題が再び生じないのであろうか。答えはノーである。私は根本的な部分の議論が欠落していると考え。それは、「信頼できる建築づくり」の議論である。いくら制度を改革しても、偽装という、プロフェッショナルが決してやってはならないことを踏み越えて行なった姿勢自体の倫理の問題と、それを生み出す土壌が変わらない限り、信頼を回復することはできないだろうし、大なり小なりの新たな問題を生み出すことになる。一級建築士が設計するに当たって、その担当した設計内容に対して、しっかりとしたプライドと責任を持つことが大切と考える。これに不可欠なのは、  
■「1、匿名性を廃止する」ことである。建築の統括設計者は誰が行なったか、構造設計は誰が行なったか、設備設計は誰が行なったかを個人名で明記することである。これは組織ではダメである。個人が消えてしまう。自分の名前を記す以上、責任は明確となる。確認申請書に明記されることは必須と考える。これについて、更に「顔の見える設計」にしていく必要がある。つまり、設計者の顔が施主から見えることである。スーパーマーケットの野菜売り場で誰が作ったかが写真入りの表示で分かり、安心感が得られるという良さは誰もが経験したことがある。設計行為の場合は更に進んで、依頼者である施主が設計者と会うことは、もちろん可能である。建売住宅の場合はかなわないが、一般戸建住宅の設計において、施主が設計者に会い、コミュニケーションを重ねて、設計内容が練られるという本来の姿の中で、信頼関係が熟成し、この施主のために設計を行なうという意識が設計者の心の中で生じるのは、人として自然なことである。設計プロセスの中で、構造設計者や設備設計者を施主に合わせる機会をつくることは、無理なことではない。施主の顔を思い出しながらの設計は、施主のパーソナリティを設計に取り入れる事にもなり、より親密感があり質の高いものを生み出すことになる。私は、設計プロセスの適切な時期に、施主との打合を設備設計者や構造設計者と一緒に行なっている。興味深いことは、我々が思う以上に専門的な内容を施主が理解し、創造的対話が出来ることである。このプロセスの中で、施主は設計者の設備的工夫や構造的な工夫、更にはその苦勞も知ることになる。これには専門用語を使わず、誰にでも分かるように説明することが大切なことは言うまでもない。

■「2、参加の設計プロセス」とは、施主が何らかの形で、設計のプロセスに関わることである。一般に施主は設計者に対して、要望や予算などの設計条件を与え、設計者はそれに応えるべく設計をする。この場合、設計されたものに対して施主は受身となり、両者に十分な信頼関係がない限りは、設

計内容に対して親密感を持つことは難しい。そればかりか気に入らない設計内容であれば、疑心暗鬼が介入することもあり、満足できない場合は信頼関係さえ失ってしまう。一方、設計者も、専門家としての自分の考え方が優先し、施主のニーズや嗜好をないがしろにしがちである。この両者にギャップがある限り、しっかりとした信頼関係を築くことはできない。この問題を解決するためには、施主が何らかの設計プロセスに関わってもらう必要がある。これには様々なやり方がある。私の場合は、ユング心理学をヒントに施主にコラージュ(切り貼り絵)を作ってもらい、それを手がかりに対話し、設計コンセプトを見出している。このことにより、施主は、設計コンセプトに対して、深い理解を示すと共に、設計されたものに対して強い愛着感を抱く。何より、施主が作ったコラージュから設計がスタートしてわけで、施主自身が作ったという意識さえ生まれる。コラージュは切り貼り絵であるため、誰でも簡単に作ることが出来る良さがあ、自分の要求を上手く説明できない子供でも参加することが出来る。コラージュからデザイン上の様々なヒントが得られる。ランダムな貼り方や律儀な貼り方といった全体構成であったり、貼られた花や車などのイメージから施主の趣味や嗜好が理解できたり、暖色系やモノトーンといった施主の好みの色が感じられたりする。施主に質問をすると、とても楽しそうに様々なことを話され、その対話の中から設計のヒントが得られる。これはユングが言う無意識が意識化される行為であり、施主の創造性を活かすことになる。施工中においては、床下に炭を敷くこと、あるいは壁塗りや手作りタイルを貼るなど、施主ができる範囲で参加を勧めている。仮に上手く施工が出来なくとも、自分がやったところは、後になって良い思い出となる。最初は躊躇されていても多くの場合は、やっている間に、没頭し、最後には楽しんでやって頂ける。

これは戸建の住宅のみならず、幼稚園の設計や大学校舎の設計でも、何らかの形で、幼児や学生など、利用者が関わる機会を作ることは可能である。幼稚園のケースでは幼児参加でワークショップを行い、幼児に色紙を壁に貼ってもらった。幼児たちはワイワイ大騒ぎで遊び感覚で園舎づくりを楽しんだ。校舎の設計では、学生達に現状キャンパスの「だから(良い点)とあら(問題点)」を抽出してもらおうと共に、理想の校舎のイメージをコラージュで作るというワークショップを行なった。学生達は、自らの環境に対して興味を深めることと共に、新校舎へ自分達のアイデアが活かされることに喜びを感じてくれた。このことにより、建築家の一方的なデザインの押し付けを避けることのみならず、施主・利用者の創造性を加味することとなった。これは、設計者と施主との創造的協同作業であり、確かな信頼関係を醸成することになる。つまり創造的なコミュニケーションの大切さである。集合住宅や街づくりなどでも利用者参加のワークショップを行なうことにより、施主と設計者との間に対話が生まれ、意識を共有することができる。この意識の共有が結果として、信頼できる確かな建築を生み出すのである。

■「3、文化としての建築づくり」は、単にハードな入れ物としての建築を造ることではなく、〈意味〉のある建築を創るということである。この〈意味〉とは何なのか。地域性や土着性を加味した建築、建築家の思想を反映した建築、施主や利用者、住民がワークショップを通して得られたコンセプトなど、様々な〈意味〉がある。近代建築は、機能性、合理性など科学をベースにして生まれた建築様式であった。これはスキル(技能、技術)を使えば、おのず建てられるハードな入れ物という側面を持っていた。問題なのは今、このスキルそのものが問われているのである。スキルだけでは、ハードな建物を造ることはできても文化としての建築を創ることはできない。つまり、確かなスキルのみならず、設計者の思想やモラルが必要とされているのである。文化をつくる姿勢は設計を裏打ちする確かな思想や基本的なモラル無しでは生まれない。ハードな入れ物で溢れた近代都市は、地域や文化

の特徴は無く、どこに行っても同じ街並みとなってしまった。これは過去の郷愁や懐古趣味の姿勢ではなく、伝統を理解し何らかの形で地域性や土着性を活かした新たな文化を創るという意味での現代建築づくりの姿勢が求められているのである。これも〈意味〉ある建築である。また、市民参加の街づくりの中で、住民が大切にしたいものを公園づくりや道、建物づくりの中に活かす姿勢は、おのずとその地域の特徴が表出した環境となる。住民参加の街づくりという設計プロセスにより、創り出すものに〈意味〉が生まれ、それが結果として文化を創ることに繋がるのである。建築家の設計思想も文化を生み出すであろう。但しこれにはしっかりと社会的モラルをベースにした設計思想でない限りは文化としての建築にはならない。様々な意味合い、様々な文化としての建築があろうが、大切なことはハードな入れ物ではなく利用者にとって〈意味〉のある建築が求められているのは確かである。この「文化の建築づくり」が結果として、利用者が建築に対して興味を持ち、身近なものとして捉えることにも繋がろう。この利用者の高い意識が設計者を刺激すると共に、利用者が監視の役目を担うことになり、設計者もそれに真正面から応える意識が生まれ、結果として質の高い良い信頼関係が生まれる。

■ イギリスに学生、教師として5年間過ごした。この中で一番強く感じたのは、市民の建築に対する高い意識である。有名建築のみならず、住んでいる地域の建物の建築家の名前さえ知っていて驚くことがあった。ここに匿名性は存在しない。誰が何を設計したかということが明確で、専門家である建築家はその安全で文化としての建物を後世に伝える大きな責任を持っていることを一般の人が認識しているのである。コミュニティアーキテクトという概念はイギリスでは一般的である。市民参加の街づくりやコミュニティセンター建設、集合住宅におけるコーポラティブハウスの設計を、ワークショップなどプロセスを大切に設計する建築家のことである。ここには、確かな専門性の中で市民と同じ目の高さで設計する姿勢がある。文化としての建築をつくる意識は、施主、使用者、市民、建築家が共有する中で、しっかりと信頼が醸成されるのである。

## □ プロフィール

連健夫（むらじたけお）・建築家、(有)連健夫建築研究室代表

1956年、京都市生まれ、多摩美術大学卒業、東京都立大学大学院修了の後、ゼネコン10年間勤務、1991年に渡英、AAスクール留学、AA大学院優等学位取得の後、同校助手、東ロンドン大学非常勤講師、在英日本大使館技術嘱託を経て、1996年帰国、(有)連健夫建築研究室を設立、設計活動の傍ら、ルーテル学院大学、川崎市民アカデミーの講師、海外でワークショップを続けるなど教育にも関わる。作品にすっぴんの家、竹のチャペル、白鷗大学はくおう幼稚園おもちゃライブラリーで栃木県建築景観賞、芦原義信奨励賞、こども環境学会デザイン奨励賞受賞、ルーテル学院大学新校舎は日本建築家協会2006年度優秀建築選。著書に「心と対話する建築・家」、「イギリス色の街」（技報堂出版）、対話による建築まち育て（共著、学芸出版社）など